

「戦後社会制度とキリスト教 1945-60」研究会

特別講演 「戦後の賀川豊彦という難問」

戒能 信生

1. 賀川豊彦という存在

日本キリスト教史において、賀川豊彦はきわめて大きな、そして特異な存在と言えるでしょう。

明治期末の時代、神戸神学校の学生として神戸新川のスラムに飛び込んだ若き賀川豊彦は、「救霊団」という独自のセツルメント活動を始めます。当時のキリスト教会が貧しい民衆や労働者たちに向き合っていないことへの批判からでした。その活動が一種の行き詰まりを見せると、賀川はアメリカに留学し、そこで学び経験したことを生かして、帰国後、新川での活動を続けながら、この国における最初期の労働運動の担い手になります。平行して神戸に生活協同組合運動を立ち上げ、さらに農民組合運動にも先駆的に手を広げていきます。また『死線を越えて』を初めとする一連の自伝的小説は、当時としては破格のベストセラーになり、賀川の名前は広く知られるようになります。1923年の関東大震災以降、神戸から東京に活動の場を移した賀川は、被災者救援活動から生まれた本所基督教産業青年会を初め、各地に様々な隣保事業を展開していきます。以降、言わば全国区となった賀川は、1926年から日本基督教聯盟を背景に、「神の国運動」という全国的な伝道活動を始めます。それは、明治期以降で最も成果をあげた伝道活動であったと評価されています。しかし戦時下に入ると、賀川はその反戦的言動が咎められて東京憲兵隊に逮捕・収監され、一ヶ月後に釈放されたものの、以降その多面的な活動は当局から自粛を求められ、一切の公職から退かざるを得なくなります。

戦時下逼塞を余儀なくされていた賀川に、敗戦直後、スポットがあたり始めます。東久邇宮内閣の内閣参与に選任されたのを皮切りに、貴族院議員に勅撰され、一躍、戦後社会のオピニオン・リーダーに躍り出るので。一時は、政界の一部に賀川を次期総理大臣の候補と見做す動きすらありました（木保敏『終戦日記』による松山常次郎の証言）。すると、賀川の戦時下のアメリカ向けラジオ放送が戦争協力として取り上げられ、戦争に荷担したとする非難が、主に日本共産党によって展開されました。そのような世間の動向に対し、例えば日本基督教団東京教区総会は「賀川豊彦氏誹謗に対する抗議声明」（1946.5.21）を決議して賀川を擁護し

ています。

そのような中で、賀川は日本社会党の結党大会の議長を務めたほか、日本協同組合同盟（現在の全日本生活協同組合連合）の会長に就任し、全国農民組合（現在の全農協＝JA）の組合長に推され、さらに1955年にはノーベル平和賞候補に推薦されます。一方キリスト教界においては、1946年から始まった新日本建設基督運動の主要な講師として、全国津々浦々にその伝道活動が展開されます。「賀川来たる」と言えば、数百、数千の人々がその講演を聴くために群れ集まりました。賀川豊彦は、言わば「戦後のキリスト教ブーム」の牽引役を担うことになるのです。

2. 忘れられる賀川が存在

しかしこのような戦後の賀川は、これほどの知名度があり、華々しい活躍をしたにもかかわらず、その後の日本社会において、例えば言論界において、またキリスト教界においても急速にインパクトを喪失し、影響力を失っていきます。

これは一つの例ですが、岩波書店から刊行されている雑誌『世界』の総索引が刊行された際、賀川豊彦が執筆しているかどうかを調べたことがあります。しかし賀川の名前はそこには全く見出せませんでした。『世界』が戦後日本を代表するジャーナリズムかどうかはともかく、それはある意味で象徴的です。あるいは、これは古屋安雄先生から直接伺ったエピソードですが、1950年代の半ば頃、アメリカ長老教会から東京神学大学に派遣されたS.H. フランクリン教授のキリスト教倫理学のゼミで、賀川豊彦を取り上げようとしたところ、出席していた神学生のほとんどが反対したので、やむなく賀川を取り上げることができなかったということです。つまり賀川豊彦の存在は、奇妙なことに急速に陰りを見せ、忘れられていくのです。

また賀川豊彦について、隅谷三喜男先生や雨宮栄一牧師がそれぞれ優れた評伝を書いています。しかしそのいずれにも、戦後の賀川についてほとんど触れられていません。その理由として、隅谷先生は「私自身も戦後の賀川を論ずることが無意味だと考えているわけではない」としつつも、「賀川の人と思想の全振幅は、戦前の言動において十分考察することができるし、またそこでこそ考察されなければならないと考えたからである」（『賀川豊彦』）と「あとがき」に記されています。また雨宮牧師は、賀川豊彦評伝三部作によって賀川の生涯を詳細に取り上げながら、戦後の賀川を取り上げることはしていません。その理由について、「歴史の評価を可能にする時間的な、或いは客観的に見うる距離がいまだに満たされて

いない」（『暗い谷間の賀川豊彦』）と説明するのみです。しかしそれは何故なのでしょう。ここに、戦後の賀川の評価を巡る困難があると言えます。

3. 敗戦直後の賀川の思想と信仰

2009年、賀川献身100年の記念事業が計画されたとき、私はその企画委員の一人として、共同研究「日本キリスト教史における賀川豊彦」を主催し、「日本キリスト教史における賀川豊彦 その思想と実践」（新教出版社）を編集しています。その際、敗戦直後の時期に全国各地で繰り広げられた「新日本建設基督運動」における賀川の主張、言説を詳細に検証したことがあります。

それは、敢えてまとめれば次のような論点に集約されます。

- ①贖罪愛の精神で日本再建に共に立ち上がろう。
- ②「君主制民主主義」（天皇制の存続）に賛成。
- ③唯物論的の革命ではなく、十字架の信仰に根差した精神革命こそ必要。
- ④協同組合運動を推進し互助共助の社会を建設せよ。
- ⑤暴力革命ではなく、平和主義に徹せよ。
- ⑥世界平和を実現するために世界連邦運動を推進せよ。
- ⑦女性の権利の拡大をはかれ。

敗戦後間もない時期、人々が茫然自失し、この国の将来について指針を見失っていた時代に、賀川が新日本建設基督運動において主張しているこれらの論点は、実は賀川自身にとっても必ずしも目新しいものではありませんでした。それは、既に大正期、あるいは昭和前期の時代に、賀川が取り組んだ労働運動、農民組合運動、協同組合運動、普選運動、さらに神の国運動などにおいて、賀川自身が盛んに展開して来た主張の、言わば戦後版焼き直しという面を見逃すことができません。事実、この時期に多数刊行されている賀川の著作の多くが、大正期・昭和前期に発表した講演や評論、随筆、小説などを再録、あるいは再編集したものであります。つまり、敢えて言えば、戦争とそして敗戦という事態は、賀川の信仰や思想に基本的な変更や転換を迫るものではなかったと言えます。戦前の賀川も戦後の賀川も、なにも変わっていませんでした。ある意味で、賀川にとって変る必要がなかったと言えるかも知れません。だからこそ、敗戦の事態に茫然自失している人々に対して、賀川はいち早く日本再建のために共に立ち上がろうと呼びかけることができたことと観ることもできます。

しかしさらに言えば、あの戦争の経験の中で深められ、練り直された思想の展開は、そこにはほとんど見られなかったことも事実です。すなわち、この時期の賀川には、戦争責任の問題、それは単に戦争に荷担したかしなかったかと言うだけではなくて、あのような戦争の中でこそ問われ、深化される思想の展開はほとんど見られなかったと言えます。そこに、賀川の新しさはありませんでした。古いままの賀川、戦前の賀川が、戦後再び脚光を浴びたに過ぎなかったと言えるのではないのでしょうか。

したがって、あの戦争の経験の中でこそ深められ、自らを問い直す思潮がやがて現れてくると、賀川の主張は急速にそのインパクトを失って行かざるを得ませんでした。時代が彼に追いつき、追い越されていくことになってしまったとも言えます。戦後民主主義の諸価値の多くは、戦前の賀川が既に主張していたものであります。新憲法が施行され、普通選挙が実施され、女性の参政権が認められ、農地解放が実施され、そして天皇が「人間宣言」をしていくと、戦後社会が賀川に追いついてしまったのです。そしてオールド・リベラリストたちの多くが思想界から退場していかなければならなかったとき、賀川もまた思想的な退場を余儀なくされたと言えるのではないのでしょうか。

それ以降の賀川は、『宇宙目的論』や『世界連邦運動』といったさらに遠い夢と理想を掲げることになります。そしてそれらの遠い理想は、戦後社会から受け入れられず、次第に忘れられていったのです。1960年4月、72歳の賀川豊彦は、「日本の教会を強くしてください、日本を救ってください、世界平和を来たらせてください、主キリストによって、アーメン」と言い残して逝去してしまいます。以降、急速に賀川存在は忘れられ、人々の記憶から遠のいていきます。

4. 最近の賀川再評価の動向

しかし賀川の死後半世紀が経過した頃から、賀川が主張していたいくつかの論点が再び評価されるようになって来ています。

その一つは、賀川が生涯をかけてこの国に形成しようとした中間集団の存在です。改めて考えてみると、労働組合、農民組合、生活協同組合、そしてなによりキリスト教会は、いずれもこの国にそれまで脆弱であった中間集団（あるいは中間勢力）の形成を意味します。それは、国家と個人の間であって、権力の支配に対抗し、政府の強権を抑止する勢力として機能するはずでありました。しかし残念ながら、この国におけるこれらの中間集団の多くは、戦時体制に、あるいは神

権天皇制の呪縛に包摂されてしまいました。そうでなくては存続自体が許されなかったとも言えます。しかし賀川が提唱したこれらの中間集団の存在は、そしてその協同組合論は、例えば最近、柄谷行人や斎藤幸平などによって、強欲な資本主義に対抗するオータナティブとして再評価されるべきと指摘されるようになっていきます。

また、その「宇宙目的論」についても、賀川の最期の著作『宇宙の目的』（毎日新聞社）は、出版当時、素人的な科学的知見と素朴な贖罪愛信仰をダーヴィニズムと混淆しているだけと酷評されましたが、ティヤール・ド・シャルダンの再評価に関連して見直されるべきとする見解も示されています。例えば、T.J. ヘイスティングス（プリンストン大学）の“Seeing All Things Whole”（2015）が上げられます。

私自身は、明治から大正、そして昭和前期にかけての時代、貧しい人々や民衆に向けて、贖罪愛の信仰を説き、共に力を合わせて立ち上がろうと呼びかける言葉をもった伝道者であったという点にこそ関心があります。その意味で、賀川豊彦のような人物とその信仰・思想を評価する方法論が、日本の教会や神学界には未だ形成されていないのではないかと考えているのです。

以上短く「戦後の賀川という難問」について私が考えていることを申し上げます。